木の葉降る

森岡　正作

山祇に酒奉り猟期来る

星流る一つは胸を貫きて

ポケットを離さぬ両手冬に入る

寂しめば詩のやうに降る木の葉かな

凍て雲を割つて日矢来る竜飛岬

黙々と人すれ違ふ鰤起し

座りよく冬至南瓜に抜擢す

雪降りぬ

学生生活を送るために雪国から上京した私には、凍て雲に覆われた東京の師走の風は、身を切られるような痛さであった。雪の中で過ごし、時には吹雪と対面して来た体であったが、雪もなく吹き付ける風の冷たさは許せぬものだった。それなのに長くこちらの生活に慣れた今では、もう雪国へ戻ろうという気持ちは起こりようもなく、ただ雪に覆われた田舎の一村の景だけが忘れられないのである。

温暖化の気候変動の影響であろう。正月に雪の積もっていない故郷が映し出される昨今であるが、少年時代の元日と言えば、ただただ白一色の穢れのない静かな世界があった。雪国で暮らす人たちの冬のご苦労に対しては身勝手な思いであるが、この季節となるといつも登四郎先生の〈**雪降りぬ忘れるほどに遠くの日**〉という御句を自己流に解釈し、遠い昔の美しい思い出に浸るのである。